

少女雑誌の部屋から

今月は「竹久夢二特集」といたしまして、夢二の様々な活動をご紹介します。

49歳の若さでこの世を去るまで、多くの作品を生み出す一方、私生活では数々の恋愛、旅を重ね、自由を愛するさすらい人でもあった夢二。つねに理想とする芸術を志し、新しい表現に挑戦し続けた波乱万丈な生涯をたどります。



竹久夢二

Takehisa Yumeji

1884-1934

明治17年、岡山に生まれる。本名は茂次郎。

明治34年に上京。翌年、早稲田実業学校へ入学する。明治38年、同校専攻科に進学、4か月で中退。在学中より新聞や雑誌に投書するうちに博文館の西村渚山の目に留まり、本欄に寄稿するよう勧められ、画家としてデビューする。

うりざね顔に長いまつ毛、憂いを帯びた表情、華奢な体つきを特徴とする女性の絵は“夢二式美人画”と呼ばれて全国の青年子女を虜にし、後続の画家たちにも多大な影響を与えた。

少女誌、児童誌、婦人誌ほか、幅広いジャンルの雑誌で挿絵等を描き、デザイン・装幀でも多彩な作品を残す一方で、詩、童謡、童話の創作にも才能を発揮した。

「大正ロマン」といわれる時代を象徴する存在として、時をこえて愛され続けている。

雑誌の仕事

明治38年、雑誌『中学世界（博文館）』への投稿を契機に画家としてデビューして以来、様々な雑誌の表紙絵、挿絵等を担当した夢二。さらには、詩歌、エッセイ、ふろくのデザインに至るまであらゆる分野で関わっていました。少女雑誌では、『少女世界（博文館）』、『少女の友（実業之日本社）』、『新少女（婦人之友社）』等の誌面を彩り、花形画家として時代をリードしていきました。

港屋絵草紙店

大正3年10月、東京日本橋に「港屋絵草紙店」（通称：港屋）を開きました。木版画、半襟、手ぬぐい、風呂敷、千代紙、便箋などなど夢二デザインの小物が色鮮やかに並べられ、大人気となりました。大正時代を背景にした漫画「はいからさんが通る」の中でも、女学生憧れの店として登場します。しかし、大正5年末、夢二の恋愛問題等により閉店を余儀なくされてしまいました。

セノオ楽譜の流行

デザインに関する仕事のうち、雑誌の次に多かったのが楽譜装幀でした。歌詞の内容から言葉のイメージを膨らませ、自由な図案を試みました。セノオ楽譜は大正4年から開始され、夢二は「お江戸日本橋」（大正5年4月発行）の表紙をはじめ、昭和4年までの15年間、280点にも及ぶ装幀を手掛けました。「宵待草」は大正7年、夢二の作詞により発表され、瞬く間に評判となりました。

大正イマジユリの誕生

大衆文化が花開き、印刷技術が進歩した大正～昭和初期、本の装幀やポスター、広告など様々なイマジユリ※が生まれます。西洋様式に日本の文化や芸術を融合させ、独自の表現として広がり、夢二も大いに関わりました。モダンでユニークな図案は人々を魅了し、日常に美をそえました。

※イメージ図像を意味するフランス語。印刷物や版画など大衆的な複製図像の総称としても用いられる。